



聖杯

エリス

の

常磐くじら
ill. 夕薙

杯

The Holy Grail of Eris

author Kujira Tokiwa

illust. Yu-nagi

試読版

りん、ごん、と鐘が鳴る。

今日のコニーは悪い子だった。父さまの言いつけを破って「しょけい」を観に来てしまったのだ。駄目だと言われていたのに、こっそり屋敷を抜け出してサンマルクス広場までやってきた。しかも、ケイトまで追連れにして。

この緑豊かな広場は、普段であればコニーやケイトたちの恰好の遊び場だった。鬼ごっこやかくれんぼ——時には敷地内にある市庁舎に忍び込んでイタズラをすることもあったが、気のいい役人たちから咎められたことはなかった。だから、平気だと思ったのだ。この場所が、コニーに恐ろしい思いをさせたことなんて一度もなかったから。

けれど、今日のサンマルクス広場は何か違った。

まず、王都中の人間がやってきたのかと思うくらいたくさんの人！こんなに人が集まる行事なんて、コニーは聖誕祭や星読祭くらいしか知らない。ただ、普段のお祭りと違うのは、皆の目がきらきらとしていることだ。きらざらと、何だかとても嫌な熱を帯びている。

あんな嫌な目をするなんて、やっぱり「しょけい」はよくないものなのだ。コニーは父さまの言

葉を思い出していた。「あれはじんどうにはんするこういだ」珍しく難しい顔をしながら、そう言っていた。六つになったばかりのコニーには、よく、意味がわからなかったけれど。

りん、ごん、と鐘が鳴る。

押し寄せる群衆に流されて、いつの間にかケイトとはぐれてしまった。気づいた瞬間、血の気が引いた。だって、今日の広場は何かがおかしい。不安になったコニーは、人の波を掻き分けて「ケイト！」と叫んだが、その声を上回る熱気に押し潰された。どうしよう、どうしよう。焦ったコニーはケイトの名を叫びながら人々を掻き分け、掻き分け、進んでいく。

そうして気づいた時には、人だかりの最前列までやって来ていた。そこはちょうど広場の中央で、目の前には見覚えのない台座がある。これも、「しょけい」のために作られたのだろうか。疑問に思ったが、すぐに首を横に振る。それよりもケイトだ。ケイトはどこだろう。

見慣れない台座以外は、いつものサンマルクス広場の光景だった。左手には建国の祖である英雄アマデウス像が、右手には聖女アナスタシア像がある。そして、少し離れたところから広場全体を見下ろすようにして聳え立つのは聖マルク鐘楼だ。

コニーがケイトを探すために踵を返そうとしたその時、わあっと周囲が沸いた。モルダバイト宮殿に続く門が開錠され、一台の馬車が広場に到着したのだ。

中から現れたのは、黒いフードを被せられた少女と、数人の男たちだった。若い者もいれば年嵩

な者もいたが、皆きちんと正装していた。それに対して少女の衣装はひどく質素な鼠色のワンピースで、ところどころほつれてさえている。

彼らが姿を見せるや否や、歓声はさらに興奮したものとなり、それはやがて怒声と罵声に変化した。飛び交うのは、コニーが今まで一度も耳にしたことがないようなおぞましい言葉だ。

異様な空気に足が凍りついて動けなくなる。けれど、ひどい悪意を投げつけられているはずの少女と言え、まるで気にした様子がなかった。騒ぎ立てる輩には一瞥も寄越さず、ただまっすぐに前を向いている。

少女は、正装した男たちに先導されて広場の中央にある台座へと進んでいった。つまり、コニーの正面だ。少女が近づいてくる。その両手首には木製の手枷が嵌められていた。

群衆の熱気はいよいよ最高潮に達したようだった。ある者は少女を指差し絶叫するように声を荒らげ、またある者は手を叩いてげげらと笑う。

りん、ごん、と鐘が鳴る。

気がつけば、分厚く黒い雲がすぐそこにまで迫っていた。ぽつぽつと雨が地面に点々を描いていく。

男のひとりが何かを命じると、少女が気怠そうに首を振った。ばさりとフードが取れて、艶やかな黒髪がこぼれ落ちる。そして、ようやくとこちらに顔を向けた。

その瞬間、コニーは息を呑んだ。

見たこともないほど美しい生き物がそこにいたのだ。雪のように白い肌に、熟れた果実のような赤い唇。そして、星を閉じ込めたようにきらきらと光を弾く紫水晶の瞳――

神々しいとはまさにこの人のことを言うのではないか。そう思ったのは、おそらくコニーだけではなかった。その証拠に、あれはどうるさかった野次がぴたりとやんだのだ。

誰も彼もが、魅入られたように少女を見つめていた。食い入るような、そんな不躰な視線に晒されても少女は全く動じなかった。それどころか、ひとりひとりの顔を確認するかのようにつつくりと広場を見渡していく。今度は見られた人々の方がたじろいでいくのがわかった。

少女はわずかに目を眇めると、ふん、と鼻を鳴らした。

それからゆつくりと口を開く。

「呪われろ」

決して大声を張り上げているわけではないのに、その凛とした声音は広場中によく響いた。

「貴様ら全員、呪われるがいい――！」

しん、と辺りが静まり返る。すぐ傍で唾を呑み込む音がした。呪いなどあるわけがない。けれど、それにしてもあまりにも堂々とした態度に動揺が広がっていく。

「ば、売女め！」ふいに誰かが声を上げた。その声はかすかに震えていた。けれどそれが呼び水となり、我に返った群衆は次々と罵声を投げつけていく。「淫売！」「悪魔！」「人殺し！」

コニーは恐ろしさに震え上がった。まだ六つのコニーは人間の悪意というものに慣れていなかった。どうしていいかわからず、怯えながら視線を彷徨わせていると、例の少女と目が合った。



寶石のような双眸がコニーを捉える。幼い子供がいるのが珍しかったのだろうか、彼女はきよ々と眼を瞬かせると、ふっと口元を綻ばせた。笑った——そう、笑ったのだ！

コニーは思わず瞳を見開いた。今度はどきどきと心臓が早鐘を打つ。今のは、なんだ。これは、なんだ。自分は、今、なにかとんでもないものを見てしまったのではないか。これは。これは——少女はどこか満足そうに微笑むと、小さく何かを呟いた。幸か不幸か、その声がコニーの耳に届くことはなかったけれど。

雨はいつの間にか勢いを増し、突き刺さるように降ってくる。風が唸る。空はどす黒く渦巻いている。死刑執行人が少女を跪かせ、高々と剣を振り掲げる。その時、地面を裂くような爆音とともに何かが光った。閃光に、コニーの視界が白く塗りつぶされる。なにも見えない。手を翳して目を細めていると、ぴちゃつと生温いものが頬に飛んできた。それから、むせかえるような錆びた鉄の匂いが。

ようやくと視界に色が戻った時には、すべてが終わっていた。剣を持った男が、まあるくて、赤いものが滴り落ちるなにかを掴み上げる。群衆から割れんばかりの喝采が上がった。「見ろ、鉄槌が下された！」「ざまあみやがれ！」「死んだ！」「死んだ！」「死んだぞ——！」

コニーは動けなかった。悲鳴も上げられなかった。たった今、目の前で起きたことが信じられなかった。

誰かが口笛を吹き、周囲がどっと沸いた。つられるように、はしゃいだ声が次々と弾けていく。

歓喜の輪は次第に大きくなっていき——しかし、長くは続かなかった。

突然、誰かが大声を張り上げたのだ。

「——おい、見ろ、火が！」

指差す先では市庁舎が燃えていた。「落雷だ！ さっきの雷が落ちたんだ！」別の誰かが叫んだ。炎がごうごうと唸り声をあげている。一拍の静寂の後、悲鳴が上がった。逃げ惑う人々が互いを押しのけ、ぶつかり合い、怒号が飛ぶ。

「邪魔だ！」コニーは誰かに突き飛ばされて地面に倒れ込んだ。硬い土に胸が打ちつけられて息がつまる。痛い。痛くて怖い。誰か。

だれか、たすけて。

小さな体のどこもかしこもじんじんと痛みを訴えていた。起き上がることもできずに視線だけを上げると、同じように倒れ込んでいる人がいた。黒髪の女性だ。手を伸ばそうとして、ふと違和感を覚える。ない。

首から下が、ない。

無造作に転がっていたものの正体に気づくと、コニーは今度こそ絶叫した。あれは、じんどうにはんするこいだ。父さまの言葉が脳裏をよぎる。ああ——

ぎゅっと目を瞑ったコニーの頭上では、暴風に煽られ、りんごりんごん、と狂ったように聖マルクの鐘が鳴っていた。

(ちよ、ちよと待つて——！)

コンスタンス・グレイルは両頬に手を当てあんぐりと口を開けると、心の中で絶叫した。

陽の落ちた庭園。目の前には抱き合う男女。もちろん恋愛は自由だし、抱擁程度では風紀を乱しているとは言えないだろう。

ただひとつだけ非常に由々しき問題があるとすれば——

それは、どこからどう見ても男の方が己の婚約者であるということだった。

※

ことの発端は数カ月前。十一代目グレイル子爵が例によつて誠実であつたために始まつた。
汝、誠実たれ。

隣国ファリスとの十年戦争の功労者であつた初代パーシヴァル・グレイルは、勝利の秘訣を求められた際にそう語つたという。それから代々グレイル子爵家のモットーは『誠実』だ。もちろんコンスタンスの父親であるパーシヴァル・エセル・グレイルも御多分に漏れず誠実な当主だった。い

や、むしろ、誠実すぎた。

例えば、友人に泣きつかれ怪しげな借金の連帯保証人となり、そのまま多額の債務を背負うことになつてしまうほどに。

ちなみにその友人は早々にどこかへと雲隠れし、風の便りも寄越さない。

何度も言うが、グレイル家の家訓は一も二もなく誠実一択。加えて質素儉約。贅沢なんて以つての外で、領地経営で利益が出てすぐさま領民に還元するのがグレイル流だ。初代パーシヴァル・グレイルから徹底されてきたこの忌まわしき伝統のお陰で、子爵家には余剰な貯えがない。

「——つまり」

事態を一通り説明し終えたと、パーシヴァル・エセルは厳めしい顔つきで娘へと向き直つた。コニーも思わずごくりと唾を呑み込む。

「つ、つまり……?!」

「つまり、返せる金などない」

グレイル家の命運はもはや風前の灯火であつた。

あのグレイル家が、お金に困っているらしい。

そんな噂を聞きつけて援助の手を差し伸べてきたのは、出入り商人として懇意にしていたダミアン・ブロンソンだった。

「大変なことになっているそうじゃありませんか」

ダミアンは、三代続くブロンソン商会の代表で、自身も准男爵の位を賜っている。ただし、貴族ではない。

平民よりは優遇されるとはいえ、准男爵では出向ける社交界も限られてくる。ブロンソン商会は王都のアナスタシア通りに本店を構え、地方にもいくつか支店を持つ老舗である。経営は安定している。安定していて——むしろ盤石過ぎて——そこから先が發展しない。だからこそ、欲しいのは新しい伝手だ。

「まったく旦那様も人が好い。損得勘定をしてくれるような人間でも近くにいればいいんですがね。そうそう、実は私には倅がおりまして——」

ダミアンには今年十七になる息子がいた。それがニール・ブロンソンである。かくして、とんとん拍子に二人の婚約は取り決められた。

「本当にいいのか？」

父から何度も確認されたが、コニー自身は別段この婚約に不満があるわけではなかった。むしろ、いよいよ首が回らなくなってきた子爵家の長女としては、願ってもないありがたい話である。

見た目こそパツとしないが、コニーとて一応貴族の娘だ。もちろん恋愛結婚に憧れはある。大いにある。エンリケ殿下とセシリア王太子妃の身分違いのロマンスを綴った本はコニーの聖典だったりもする。けれど、お家の一大事となればそんなもの天秤にかけるまでもない。

そもそもこの世のすべての人間が恋した相手と結婚できるわけではないのだ。コニーのように十人並みの器量しか持たず、性格だって大人しく、引つ込み思案の娘なら尚更だ。

ニール・ブロンソンは、背が高く、ハンサムで、紳士的な好青年だった。だから、こんな人が夫になるならちっとも悪くないとコニーは思っていた。

本当に、そう思っていたのだ。

彼が、婚約者以外の女性に夢中なのだ、という噂を耳にするまでは。

「——パメラ・フランシス？」

「ええ。ニール・ブロンソンは彼女にご執心みたいね。人目を忍んで抱き合っているのを見たという人がいるんですって。でも、彼ってあなたの婚約者なんでしょう？」

そう告げられたのはちょうど一週間前。相手は知り合いのご令嬢だった。

「ニールが、パメラと……」

パメラ・フランシスはたいそう魅力的な淑女である。いつも大勢の人に囲まれていて、取り巻きの中には必ず見目麗しい殿方がいる。

彼女がすごいのは、とびぬけた美貌を持っているわけではないのに、どうやったら自分が一番愛らしく見えるかよく知っているとこだ。プラチナ・ブロンドのふんわりとした髪はいつも器用に編み込まれているし、夜会用のドレスは必ず、貴族の子女であれば一度は着てみたいと憧れる【月の妖精】という高級洋裁店で仕立てている。

「パメラはね、舞踏会のダンスのようになると男を変えるらしいわよ」

なにそれこわい。コニーは慄いた。地味でパツとしない子爵令嬢なんかが敵うわけがないではな

いか。

それに、男爵とはいえ領地で採掘される鉱石の取引で成功を収めているフランシス家は、グレイル家とは比べ物にならないくらい裕福だった。ブロンソン商会にとつても悪くない相手のはずだ。念願の貴族の伝手^てだつて手に入るし、それに、もしかしたら鉱石の権利も得られるかもしれない。誠実しか取り柄のない貧乏貴族よりもよほど良い。

そこまで考えると、コニーは天を仰^{あお}いだ。そうしないと、何かみつともないものが目から流れてしまいそうだったからだ。

こんなこと、父には言えない。言えるわけがない。だつてすでにこの婚約は恙^{つつが}なく締結されてしまっている。両親とともに教会での誓約^{せいやく}を済ませたのはつい先日のことだ。今は結婚への足踏みと言われる婚約公示期間であり、領地にだつて報せ^{しらせ}がいつているはずだった。そんな中での、不貞疑惑、だなんて――

もちろんコニーが異議申し立てを行えば、十中八九、破棄できるだろう。けれど、それでは借金返せない。それに事が公になれば、どこまでも誠実である父は、間違ひなくクローゼットの奥から埃^{ほこり}を被^かつた銃を持ち出し、ニールの足元に白手袋を投げつけるに決まっている。

即ち、どちらかが死ぬ。

（ああ、もう、誰か助けて――）

齢十六にして、コニーの人生はどん詰まりだった。

※

結局、願いは届くことなくコンスタンス・グレイルは衝撃の現場を目撃することになったのだが――ひとまず、時はその数刻ほど前に遡^{さかのぼ}る。

「ご婚約おめでとう、グレイル嬢」

「ありがとうございます」

「でもあれよ結婚なんてね、手入れの行き届いた地下牢^{ちかろう}にぶち込まれるようなものなのよね。というわけで我らが豚小屋にようこそ、生まれたての子豚ちゃん。歓迎するわ」

「……あ、ありがとうございます」

そう言つて、ちつともおめでたくなさそうに祝福をくれたのは一癖あるエマニュエル伯爵夫人。

「あらコンスタンス、あなた婚約したんですって？」

「ええ、実はそうなんです」

「まあ、まあ！ あなたとはそんなに親しくないけれど、ぜひとも式には呼んでちょうだいね！」

「え、ええ、もちろんです」

「ふふ、嬉しいわ！ そうそう、ちょうどブロンソン商会で取り扱つてゐる絹織物が欲しかったのよね、あの王都限定品のやつ」

「……ええと、その、引出物に用意しておきます……」
いつだってちゃっかりしているのはボーデン男爵夫人。

「ちょっと聞いたわよ、コニー！ あなたの婚約者のニール・ブロンソンって、あのパメラと噂になってる相手じゃないの！ どういうことなのか詳しく聞かせなさいよ！」

「むしろ私の方が知りたい」

ちよっぴり図々しくてかなり無神経な子爵令嬢のミレーヌはゴシップが大好きだ。

例の噂を耳にしてから一週間。真相を確かめる勇気も出ないまま、ニールとは絶賛婚約中である。そんな折に招待を受けた小宮殿での舞踏会は大盛況だった。

主催者であるドミニク・ハームズワース子爵の機嫌も上々で、芝居がかった仕草で何度も運命の三女神に感謝を捧げていた。ちなみに子爵は貴族の当主としては珍しく聖職者も兼任している。

子爵はもともと五人兄弟の末っ子で、幼い頃から教会に身を置いていたという。けれど成人してから数年もしないうちに、領地での流行り病が原因で親兄弟が呆気なく死んでしまった。そのため聖職者であつた彼が爵位を継ぐことになったのだ。

教会での清貧の教えがよほど性に合わなかったのか、叙爵されてからの子爵は放蕩三昧だったそうだ。それでも破門されないのは荷馬車いっぱいの寄付金を納めて徳を積んでいるからだと言われている。

ている。

ハームズワース家は肥沃な領地を持つ有数の資産家なのだ。

そもそも、そうでなければ、小宮殿で舞踏会など開けない。

現在、国王夫妻が住まわれているモルダバイト宮殿の広大な庭園内には、ふたつの離宮がある。

ひとつは王太子夫妻の住まうエルバイト離宮。比較的新しく建てられたもので、実用性を重んじており、質素な佇まいをしている。

そしてもうひとつが、この国が栄華を誇ったミシエリヌス王の御代に建築された豪華絢爛な娯楽用の小宮殿——グラン・メルルアンだった。現代では観光名所となっており、社交シーズン中は三代以上続く貴族であれば誰でも大広間を貸し切って舞踏会を開くことができる。といっても莫大な費用がかかる割に制約が多いので、町屋敷を持つ真つ当な貴族たちはまずやらないが。

ちなみに小宮殿の大広間は、十年前、かの大罪人スカレット・カステイエルがエンリケ殿下にその罪を糾弾された舞台でもあつた。

その際にスカレットとの婚約を破棄し、当時まだ子爵令嬢であつたセシリア王太子妃との婚約を宣言したとされていることから、ここは今や王都有数の愛の巡礼地のひとつになっている。

蠟燭のゆらめきを受けて、豪奢なシャンデリアが広間にきらびやかな明かりを灯す。中央に集まった招待客たちは、楽士たちの奏でる音楽に合わせて陽気なステップを楽しんでいる。四隅には軽食のスペースが設けられ、そこではコニーを含め、踊りに参加しない者たちがカクテル片手に優

雅に談笑していた。

「おめでとう、コンスタンス」

「ありがとうございます」

すでに婚約が公示されているせいか、祝福を告げにやってくる知人が後を絶たない。けれど、そのすべてに笑顔を貼りつけて対応するのはさすがに骨が折れた。見知った顔への挨拶回りは終わったはずだ。ちょっと一息ついても許されるだろう。別のテーブルで紳士連中とカードゲームに興じていたニールも先程から姿が見えないので、彼もどこかで休んでいるに違いない。

コニーはこっそりと大広間を離れると、開放されていた温室に出た。

白い木枠で縁取られた全面ガラス張りの室内では、物珍しい南方の花や、異国の植物が育てられている。天井までもがガラスで出来ていて、頭上では煌々と星が瞬いていた。どこかの窓が開いているのか、ひんやりとした外気が火照った肌を撫でていく。

——馬鹿だと笑われるかもしれないが、実のところ、コニーはまだニールを信じていた。

よくよく考えてみれば、すでに教会で宣誓を行い、婚約公示までしているのだ。本当にパメラを愛しているのならば、その前に何か行動を起こすだろう。

それに、ニールの態度だって普段通りだった。普段通り、コニーに優しくかった。今日だってドレスが似合うと褒めてくれた。そもそも、当人から直接聞いたわけではない。噂だけを鵜呑みにするのはいささか誠実に欠けるのではないか。

ニールは今日も馬車を用意して迎えに来てくれたし、エスコートだってしてくれた——

たぶん、この噂はただの勘違いなのだ。もしくは根も葉もないでたらめ。そうだ。そうに違いない。そう思うと、少し気分が晴れてきた。今なら超高速ワルツだって三倍速で踊れそうだ。

大広間に戻る前に窓を閉めておこうと風の出入り口を探す。すると窓ではなく、庭園に続く扉がわずかに開いているのだと気がついた。近づけば、ガラスの向こう、夜に沈み込む庭園の茂みに人影がふたつ見える。なんだろう。じつと目を凝らして——コニーは思わず悲鳴を上げた。心の中で、
(ちょ、ちょっと待って——！)

目の前で抱き合っていたのは、どちらもコニーが良く知る相手だったのだ。そして、今、最も見たくない組み合わせでもあった。

ニール・ブロンソンと、パメラ・フランシス。

呆然と立ち尽くすコニーに気がついたのは、パメラの方だった。ニールと仲良く睦み合っていた彼女は、視線を感じたのかふとコニーのいる方に顔を向けた。野外とはいえ宮殿内だ。外灯は整列するように等間隔に並んでいる。コニーには、パメラの薔薇のように上気した頬の様子まではつきりと見えた。目も合った。ぜったいに合った。けれど不貞を働いたはずの当人はなぜか平然としていて、逆に堂々とコニーを見返してくる。挑発するように口の端が吊り上がった。

それから彼女はニールの首に腕を回すと、ゆつくりとその顔に唇を寄せていったのだった。

——なんてこったい。

温室から大広間につながる廊下。見事な装飾が施された大理石の柱に腕をついて、コニーはがっ

くりと項垂^{うなだ}れていた。

（あんなものを見せられて、いったいどうしろと）

大衆向けの恋愛小説あたりだと、浮気女に「この泥棒猫！」と叫んで往復ビンタするか、浮気男に包丁を突きつけて「あんたを殺してあたしも死ぬ……！」と詰め寄るのが定石なのだが、コニーのような初心者^{ルキ}には些^{いさ}かハードルが高すぎる。

おそらくニールの方は浮気現場を見られたことに気づいていないと思うが――

「み、見なかったことにしたい……」

どうせ恋愛結婚ではないのだ。向こうは貴族の伝手^{つて}、こちらは借金の返済。そこに愛なんてないのは端からわかっていたはずだった。

「そりゃあ、ちよつとはときめいたりもしたけど。だつてハンサムだったし。優しくったし。でもきつとあれは小匙^{さじ}二杯分くらいの――ううん、小指の爪先^{つまさき}ほどのときめきだったはず。だから別に、こんなたいしたことないし、ぜんぜん、傷ついてなんて、ないし……」

結婚する事情が事情だけに、余計な波風は立てたくない。けれど。

「でも、このまま黙っているっていうのは、誠実な対応じゃないかもしれない……」

汝、誠実たれ。それがグレイル家のモットーなのである。

不貞の現場など見なかったことにしたいが、これから伴侶としてニールと誠実な関係を築くためには腹を割って話す必要があるような気もする。

それに、責めを負うのはニールの方だ。間違っても、あちらから婚約破棄してくるなんてことに

はならないだろう。そんな不誠実な事態になるのは、あの悪名^い高いスカーレットくらいだ。

――スカーレット・カステリエル。恋敵であったセシリア・リュゼ子爵令嬢に対する数々の嫌がらせに加え、彼女の暗殺まで企てた希代の悪女。そのあまりに非道な振舞いから、婚約破棄のみならず、処刑までされることになったのはあまりにも有名な話だ。

コニーの場合とは、ぜんぜん、違う。

「……よし」

とりあえず、話し合おう。話して決めよう。そうしよう。

それが一番誠実なはず、とコニーが覚悟を決めて顔を上げた次の瞬間。

「――ひいっ!？」

いつの間にか、目の前にひとりの少女が立っていた。

考えに没頭していたせいだろうか、気配などこれっぽっちも感じなかった。年の頃はおそらくコニーとさほど変わらない。少女は、コニーではなく、音楽や笑い声が漏れてくる広間の方をじっと見つめていた。その表情はどこことなく虚ろ^{うつろ}である。

「あのう……」

どうかされましたか？ そう訊^きこうとして、はっと息を呑んだ。少女の容貌が、ひどく美しいことに気づいたからだ。

艶やかな黒髪。肌は穢^{けが}れのない初雪のように白く透き通り、その肌を包むドレスは燃えるような深紅だ。

そして、宝石のような瞳は見事なまでの紫水晶だった。この国では紫の瞳は王家の色とも言われている。王族に多いのだ。コニーは思わず現王族の系譜を思い浮かべたが、該当する年頃の王女はいなかった。それ以外で紫、もしくはそれに近い色を持つるのは、王族が降嫁してくるような大貴族に限られる。つまり、どちらにせよ、この少女はかなり高貴な身分ということだ。

確か——とコニーは大広間での参加者を振り返る。確か、今日の招待客には侯爵以上はいなかったはずだ。金が喰るほどあるとはいえ、ハームズワースは子爵家だ。王族主催の大規模な夜会でもない限り、上位貴族と下位貴族の社交場には隔たりがある。今回招待されたのもだいたい子爵や男爵だった。伯爵にしたって、堂々と参加しているのは変わり者のエマニュエル夫人くらいである。けれど、下賤な夜会を好む貴人というのは一定数いるものだ。身分の高い彼らは主催者を通して、下位貴族や准貴族の集まりにお忍びでやってくることもある。

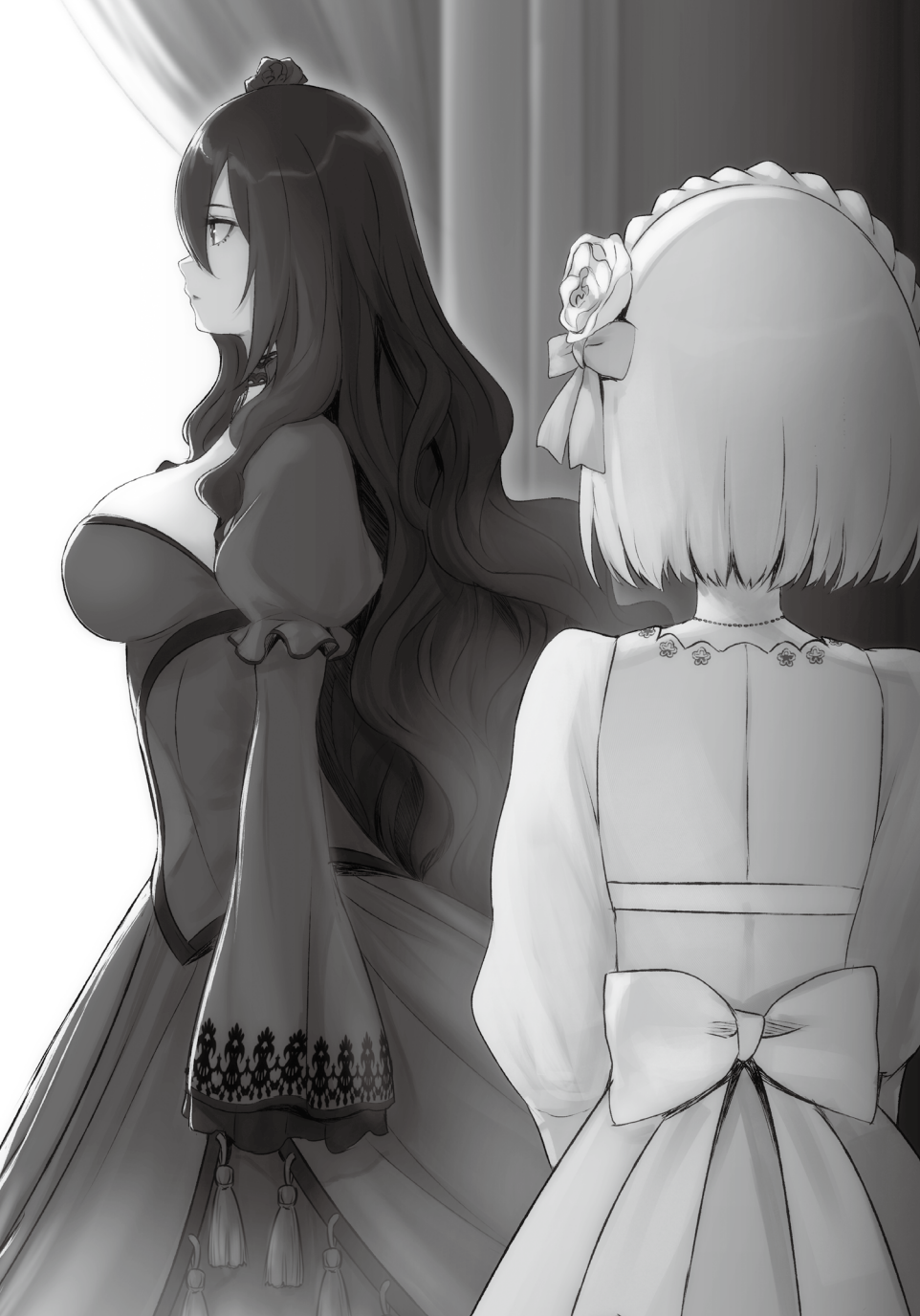
きつと彼女もその類なのだろう。コニーはそう見当をつけた。

「あの……わたくし、コンスタンス・グレイルと申します。失礼ですが、ご気分でも？ よろしければ、人をお呼びしましょうか？」

そう言って少女に近づいたコニーは、ぱっと頬を染めて視線を彷徨わせた。

深紅のドレスは大きく襟ぐりが開いており、柔らかそうな胸元が露わになっていたのだ。

おそらく己とそう変わらぬ年だというのに、この少女が醸し出す得も言われぬ色気はなんだ。そもそも、昨今のドレスの流行は貞淑を強調する露出を控えるタイプなのだ。そう考えると少し古いデザインのはずなのに全く野暮ったくない。それどころか、この気の強そうな美貌を持つ少女にぴ



たりと嵌^{はま}まっている。下品など微塵^{みじん}もなかった。そこにあるのは圧倒されるような美しさだけだ。

この子が大広間に降り立って一度でも微笑^{はえ}めば、おそらくそれだけで今年の流行が変わるだろう。

『……楽しそうね』

食い入るように少女を見ていたコニーは、その声に、はっと我に返った。彼女の視線はまだ大広間に向けられていた。

「入らないのですか？」

当たり前のように訊^きねれば、きょとん、と顔を傾けられる。

『入って、よろしいの？』

「へ？」

今度はコニーが首を捻^{ひね}る番だった。

「もちろんですよ」

むしろ、よろしくない理由がない。

どうぞ、と手のひらで広間の方を示すと彼女はふらふらと足を進めた。その様子はどうにも危なっかしい。

少女はそのまま廊下と大広間の継ぎ目を踏むと、急に立ちどまった。

『……はいれた』

そりゃあ、入れるだろう。

けれど、それが心底驚いたというような声だったので、コニーはいよいよ不審に思った。カクテ

ルの飲み過ぎかと思っていたが、もしや禁止されている幻覚剤の類でも——？

ふふふ、と鈴を転がすような声がした。

『——お前、礼を言うわ』

ぱっとこちらを振り向いた少女の顔には、満面の笑みが広がっている。

あまりにも鮮やかなそれに見惚^{みと}れている間に、彼女は軽やかな足取りでホールへと消えていった。残されたコニーはぼつりと眩^{くら}く。

「お、おまえ……？」

その口ぶりはまるで女王様である。やはり、高貴な方のお忍びだったのだろう。

大広間に戻ったコニーは、大皿から掻^かき攫^{さら}うようにして焼き菓子^{かし}を口に放り込む。やけ食いである。ニールの姿はまだ見えない。ついでにパメラも。気づいたら皿は空になっていた。なので、迷わず次の皿に手をつける。

口いっぱいにすみれの砂糖漬^{はちま}けを頬張^ほっていると、おずおずと祝いの言葉をかけられた。振り返れば、そこにいたのは男爵令嬢のブレンダ・ハリスだった。コニーは、ごくん、とすみれを飲み込んだ。意外な人物の登場に思わず目を丸くする。

ブレンダは、パメラ・フランシスの取り巻きのひとりだ。気が弱くて、いつもおどおどしながらパメラの顔色を窺^{うかが}っている。

定型の挨拶を終えると、ブレンダは明らかにほっとしたようにそそくさと踵^{かかと}を返した。そんなに

嫌なら来なければいいのに。実は律儀な人間だったのだろうか？ 何気なくその背中を目で追って、コニーは「あっ」と声を漏らした。

「ブレンダ、あなた、髪飾りが取れそうよ」

そう告げれば、ブレンダはぎくりと体を強張らせた。けれどコニーは気にしなかった。近づいて、後頭部を指差す。

「ほら、髪もほつれてきてる。飾りが落ちたら大変だわ」

「そ、そう、ね」

「いつそのこと取ってしまったら？」

ブレンダはか細い声で「そうするわ」と呟いた。それはそれは悲壮な声だった。髪が乱れるのがそんなに嫌なのだろうか。

「ちよっと触ってもいい？」

コニーの提案に、ブレンダはあからさまに肩を震わせた。心外である。別に取って食いやしない。少し悩んでからおおずおと頷いたブレンダの栗毛色の髪を、コニーは手早くまとめ直した。

「ほら、こうすれば髪飾りがなくても可愛らしいわ」

励ますように告げれば、とうとうブレンダは泣き出しそうな表情になった。ますますわけがわからない。どうしていいかわからずに困っていると、彼女は俯いて、絞り出すような声を上げた。

「あ、あの、私、バッグを二階に置いてきてしまつて。すぐに取ってくるから、それまで、こ、この髪飾りを、持っていて、もらえるかしら」

「ええ、もちろん。お安い御用よ」

ちようどコニーは夜会用の小物入れを持つていたため、ふたつ返事で了承する。

ブレンダから手渡されたのは、花飾りが施された金地に白いパールが連なった華奢な髪飾りだった。壊してはいけないとハンカチに包み、そつと中にしまう。ブレンダはこちらを振り返りもせず、階段を上がつていった。なんなのだろう、あれは。

暴食のせいで口の中がすっかり甘くなつてしまつた。近くにいた給仕から紅茶を受け取ると、ふと視線を感じてコニーは顔を上げた。そこにいたのは何度か夜会で見かけたことのある小柄な青年——ウェイン・ヘイスティングだ。どうやら今のやり取りを見ていたらしい。同じ下位貴族なので面識はあるが、言葉を交わすほど親しくはない。軽く会釈すると、あちらも会釈を返してきた。

いつの間にか明るくテンポの良い曲は終わり、今はゆったりとした調べに合わせて男女が輪を描きながらくるくと踊っている。

ブレンダはまだ戻ってこない。ぼんやりと二階へと続く螺旋階段を見上げていると、そこから颯爽と姿を現したのはパメラ・フランシスだった。その傍らにはニールと、俯いたままのブレンダがいる。

「コンスタンス・グレイル！」

パメラは広間中に聞こえるような甲高い声を上げた。

「あなた、とんでもないことをしてくれたわね——」

いったい何事かと、周囲の視線が一斉にこちらを向く。パメラがひどく満足そうに口の端を吊り上げた。

「あなたの家が大変なことは知っているわ。でも、だからと言って、これはちょっとやり過ぎではなくて？ 正直、品性を疑うわ」

言葉を向けられたコニーにも注目が集まっていくな。慣れない状況に、思わず上擦った声飛び出た。「な、なんの話？」

「あら、とほけるつもり？ でも無駄よ。——あなた、ブレンダの髪飾りを盗んだでしょう」

——ブレンダの髪飾りを、盗んだ？

いったい何の話をしているのだろう。けれど、敵意と悪意を向けられているのだけは痛いほどわかって、コニーの心臓がどくどくと早鐘を打つ。

「ブレンダから聞いたわ。髪がほつれそうだから直してあげると言ったそうね。でも、それからすぐに、ブレンダは大事な髪飾りがなくなっていることに気づいたそうよ。ねえ、コンスタンス・グレイル。そのことについて、あなたはどっと思ってる？」

「どう、って」

「希少なイエラ海の涙真珠と、純金の髪飾りだもの。お金に困っている人間にとっては咽喉^{のど}から手が出るくらい欲しいものよね。ええ、ええ、気持ちいほどわかるわ。あなたのお家のかわいそうなご事情はよく知っているもの」

「わ、私は、ブレンダに頼まれて……」

「頼まれて？ そう、あなたは盗んでいないと言うのね？」

事情を話したいのに矢継ぎ早に言葉を投げつけられて、答えるだけで精一杯になる。

「そうよ、だって——」

「なら、そのポーチを見せなさい」

「え……？」

「盗んでいないと言うのなら、見せられるはずよね？」

コニーは思わず怯^{ひる}んだ。怯^{ひる}んでしまった。だって、中には、ブレンダの髪飾りが入っているのだ。そしておそらく動揺^{うごゆ}が顔に出た。今まで怪訝^{けげん}そうにしていたニールがわずかに目を見開く。

「コンスタンス、君、まさか」

「違う！」

コニーは叫んだ。けれどその手から強引^{ごういん}にポーチが奪われる。違う、違うのに。パメラがポーチをひっくり返してテーブルの上に中身をぶちまけた。がしゃん、と硬質な音がする。あらやだ、と大袈裟^{おおげさ}な声がした。

「ねえ、コンスタンス・グレイル？ あなたは盗んでいないと言ったけど、これはいったいどういうことかしら。きちんとご説明頂ける？」

ハンカチから金の髪飾りが顔をのぞかせていた。それを見て、ニールが黙り込む。周囲の人々が、ひそひそと何事かを囁^{ささや}き合った。

違う。コニーは盗んでなんていない。ぐるぐると熱いものが咽喉^{のど}までせりあがってくる。堪える

ように、ぐっと拳^{こぶし}を握り込んだ。

「……ブレンダから、頼まれたのよ」

そうだ。コニーは、やましいことなどしていない。

けれどパメラは残酷だった。残酷に、コニーを追いつめていった。

「頼む？ 見たところ、これは特別嵩張^{かさば}るものでも壊れやすいものでもないただけれど。それなのに、わざわざ持つていて頼まれたの？ ブレンダに？ たいして親しくもないあなたが？ それはずいぶん不思議なお話ねえ」

同意するかのように、どこからともなく嘲笑^{ちやうしやう}が上がった。疑われているのだ。かつと体が熱くなる。コニーはたまらず声を荒らげた。

「——ブレンダ！」

びくり、とブレンダが体を震わせる。

「お願い、言って！ あなたが私に頼んだのよね？ ポーチを取りに行く間だけ預かって欲しいって。そうよね、ブレンダ？ ……どうして、黙っているの？ ブレンダ、ねえ、ブレンダってば……！」

コニーが問いかける度にブレンダは背中を丸め、どんどん縮こまっていく。

「——言い訳は見苦しいわよ」

ふいに聞こえてきたその声は、恐ろしいほど慈愛に満ちていた。

「かわいそうに、ブレンダったら怯^{おび}えているじゃない。いいのよ、ブレンダ。何も言わなくていい

の。……ほら見たでしょう、ニール。こういう女なのよ」

パメラはそう言つて、ニールの腕に甘えるようにしなだれかかった。

「すぐにでも婚約の異議申し立てをすべきだわ。これは、れっきとした犯罪行為よ。結婚なんてしたら、ブロンソン商会の信用^{かか}に関わるもの」

ニールは戸惑ったようにコニーと髪飾りを見比べていた。

「だが、証拠もないのに……」

「証拠？」

パメラはせせら笑った。

「そんなの、ここにいる人みんなが証人になるじゃない！ ああそうだわ、ここには聖職者のハームズワース子爵がいらっしゃったわね。何なら今申し立てをしまえばいいのよ。——どなたか子爵を呼んできていただけないかしら？」

「違う、私は盗んだりなんて……！」

その言葉に、パメラがコニーの方へと顔を向けた。軽蔑^{けいべつ}したように、吐き捨てる。

「何が誠実のグレイルよ。あなたなんてただの泥棒じゃないの」

「ちが——」

あまりの衝撃に、息ができない。助けを求めるように広間を見渡す。けれど返ってくるのは、蔑^{あやう}むような冷たい視線だけだった。そんな中、青ざめたウェイン・ヘイスティングと目が合った。あ

の時、彼も見えていたはずだ。思わず縋^{すが}るように見つめれば、さっと視線を逸^そらされた。面倒なこと

には関わりたくない、その顔に書いてある。

ぐらり、とコニーの視界が揺れた。

——だれか。

あの場には他にも人がいたはずだった。見知った顔もいくつかあった。けれど、その誰もが口を閉ざしてコニーを見捨てた。

——だれか、たすけて。

じわりと涙が滲む。咽喉の奥が熱い。わかっている。わかっているのだ。けっきょく誰も助けてくれない。コニーのようなちっぽけな人間をわざわざ助ける人などいない。

『——いいわよ』

その声は、唐突にコニーの耳元に落ちてきた。

「……え？」

鈴が転がるような軽やかな少女の声。この声は、どこかで聞いたことがある。それも、つい今しがた。

『助けてあげる』

愛らしい口調は、傲慢で、不遜で、どうしてもか惹きつけられて。

『でも、その代わり——』

コンスタンス・グレイルは、その言葉を最後まで聞くことができなかった。なぜなら突然ぱんつと何かが体に飛び込んできて、コニーの意識はそこで一旦途切れたからだ。

※

この女は、誰だ。

目の前で底の知れない笑みを貼りつけたコンスタンス・グレイルを見て、パメラ・フランシスは背筋を凍らせた。

この地味な少女は、ついさっきまでパメラにとって取るに足らない小者に過ぎなかった。どこもかしこもパツとしないくせに、誠実などという世迷言を堂々とひけらかす、おめでたい女。

他の令嬢だったら揶揄されるような幼稚な振舞いも、グレイルの人間だからと許されるのが昔から気に食わなかった。その上、婚約者はあのニール・ブロンソンだ。背が高く、ハンサムで、まるで舞台役者のように輝いていた青年。

どうしてあの女ばかり優遇されるのだ。コンスタンスなんて、その見た目も、実家の資産も、パメラよりもずっと下の人間のくせに。

だから、潰すことに決めたのだ。

——ブレンダ・ハリスを呼びつけたのは夜会が始まる直前のことだった。

「そ、そんなことできないわ」

パメラの計画を聞かされたブレンダは、顔を引き攣らせると弱々しく首を振った。

「じゃあ、マデイみたいになってもいいのね？」

ずっと目を細めれば、今度はひとつ悲鳴が上がる。

マデイ——マディソン・スコットは、去年までパメラの取り巻きのひとりだった。陰気なブレンダと違い、明るくて頭の回転もそこそこ良かったのでパメラのお気に入りだったのだけれど、たま他の友人にパメラの悪口を言っているところを聞いてしまった。

それからかわいそうなマデイはパメラの玩具になった。彼女はたったの数カ月程度で心を病んで、今は領地で静養している。

がたがたと震えるブレンダに近づくと、頭につけられた髪飾りを思い切り引つ張った。きれいに結われた髪が乱れる。ブレンダが怯えた目でパメラを見てくる。その目の奥をじつくりと覗き込みながら、パメラは命じた。

「ねえ、ブレンダ。何度も言わせないで？ 私だって、何も無理にとは言わないわ。そうね、もしも——もしもコンスタンスがあんたのみつともない髪について何も言わなければ、そのまま帰ってきてもいいわよ」

ブレンダは何度も頷いた。一縷の望みだと思ったのだろう。けれど、それはあり得ない。ブレンダには悪いが、相手はあのコンスタンス・グレイルだ。

地味でばつとしない彼女が、反吐が出るほどの偽善者だということをパメラはよく知っていた。

——知っていた、はずなのに。

「泥棒、ねえ」

パメラの計画は順調だった。ブレンダは予定通り髪飾りをコンスタンスに預け、パメラが広間の中央でそれを糾弾する。誰もがコンスタンスを見ていた。コンスタンスを疑っていた。愕然としたコンスタンスが力尽きたように俯いて——そして、再び顔を上げた時には何かが違っていたのだ。その何かが、いったい何なのかはパメラにはわからない。けれど。

「ふふ、いったい、どちらが泥棒なのかしらねえ」

あのコンスタンス・グレイルが、こんな風に、底意地悪く笑える女だとは知らなかった。

「……どういう意味よ」

余裕のある、嫌な笑い方だった。追いつめているのはこちらのはずなのに、どうしてか追いつめられているような気持ちになる。それが不愉快で仕方なくて、パメラは目の前の少女を睨みつけた。しかしコンスタンスはまるで気にした様子もなく、にっこりと微笑むとよく通る声でこう告げた。「ねえ、ご存知？ あなたが茂みではしたなく腰を振っていたお相手は、わたくしの婚約者様なのよ？」品のない発言に周囲がどよめき、かっとパメラの頭に血が上った。よくも——よくもこんな大勢の前でそんなでたらめを！

「そんなことしてないわ！ ニールとは口づけをしていただけよ！ あなたって、なんて無礼なの！ 恥を知らないさい！」

「パメラ！」

焦ったようなニールの声にパメラははっと我に返った。しまった。嵌められた。コンスタンス・

グレイルなんかに！

コンスタンスは意地悪く口の端を吊り上げた。

「あらやだ、言い間違えたみたい。そうね。あなたは、ただ、口づけをしていただけだったわね——他人の、婚約者様と。でも、それって立派な泥棒でなくて？」

ふたりの関係は周知の事実であったが、噂のままであるのと、当人が認めてしまうのでは話が違ってくる。それも、こんな無様な形で。明日にでもパメラ・フランシスはうっかり口を滑らせた間拔けな女だと噂になることだろう。屈辱に唇が戦慄く。けれどまだ負けたわけではない。痛み分けた。いや、むしろ傷を負うのはコンスタンスの方だ。

「……それでも、あなたがブレンダの髪飾りを盗んだ事実は変わらないわ」

犯罪者はそちらの方だと指摘すれば、先程までの狼狽ふりが嘘のようにコンスタンス・グレイルはあっさりと肩を竦めた。それから視線をぐるりと巡らせると、ある一点で留める。

視線の先にはひとりの青年がいた。

「ねえ、そのの——ちょっと待って今記憶をたどるから——そう、ウェイン。ウェイン・ヘイスティング！」

聞き覚えのある名前に、パメラは小さく舌打ちをする。なんて間の悪い奴なのだ。あの痩せっぽちは相変わらずパメラを苛々させることが上手だ。

ウェイン・ヘイスティングは、その昔、パメラが取り巻きとともに苛めていた相手だった。

「あなた、見ていたわね？」

「ば、僕は——」

そばかすだらけの顔が、窺うようにパメラを見てくる。もちろん、喋ったら承知しない。すっと目を細めれば、ウェインはびくりと肩を震わせて俯いた。そして、それきり黙り込む。

コンスタンス・グレイルはその様子をじっと見つめていた。

「——そう。言いたくないのなら、けっこうよ。けれど、気をつけることね。あなた以外にも真実を知る者はたくさんいてよ？」

そして楽しそうに目を細めると、ゆっくりと広間を見渡していく。

「わたくし、こう見えて記憶力がとってもいいの。——スタン子爵夫人にプロワ男爵令嬢、それにベラム子爵もいたわね。あとは——この子は名前を知らないみたいだけど、レモン色のドレスのあなた。そう、あなたよ。あの時、こちらをご覧になっていたわね？ ええ、いいわ。いいわよ。皆様、何もおっしゃらなくて大いにけっこう」

突然名指しされた面々は驚いたように目を見開き、それから、すぐにばつが悪そうな表情を浮かべた。

「だってこんなお粗末な茶番、調べればすぐに片がつくもの。ただね、わたくし、煩わしいのが大嫌いな」

そう言うのと、コンスタンスはその表情と口調をがらりと変えた。

「だから、もう一度だけ訊くわよ。——ウェイン・ヘイスティング。下を向いていないで、わたくしを見なさい」

そこにいたのは平凡な小者ではなく、圧倒的な存在感を持つ何かだった。まるで心臓を鷲掴みにされたような感覚に陥ってパメラは思わず身を震わせた。ウェインも小さく息を呑んでいる。

「今のあなたの紳士らしからぬ振舞いを見たら、お母様はさぞお嘆きになることでしょうね。それでもよろしいの？」

とうとう耐えられなくなったのだろう。今にも泣き出しそうな表情を貼りつけたまま、ウェイン・ヘイスティングはのろのろと顔を上げた。

「よくできたわね」そう言って、コンスタンスが満足気に口角を持ち上げる。

「ねえ、ウェイン？ あなたとは今後も良いお友達でいたいと思うのだけれど、あなたは どう思ってる？」友達も何も、コンスタンスとウェインは単なる顔見知り程度だったはずだ。だというのに、その自信に溢れた態度に胸騒ぎがして、パメラは小さく唇を噛んだ。

「たとえば、無実の人間を冤罪に陥れることは許されることなのかしら？」

いつの間にか、広間は静まり返っていた。

「なら、その事実を知りながら保身のために沈黙を選ぶ人間は？」

彼女は謡うように次々と言葉を紡いでいく。

「わたくしはね、こう思うの。そんな人間は地獄に落ちるだろうし、見て見ぬふりをしていた者も同罪だって。ねえ、ウェイン、想像してみて？ もしも真実がつまびらかになった時、あなたはどんな立場になって、どんな風に噂されてしまうのかしら——」

ウェインは明らかに動揺していた。視線が泳ぐ。そして、もう一度パメラの方を見ようとして――

「こちらを見なさい、ウェイン・ヘイスティング。わたくしから目を逸らすなんて許さなくてよ」

その言葉に、ウェインは、はっと前を向いた。視線の先には、コンスタンスがいる。衣装も化粧も地味なくせに、なぜか得体の知れない威圧感を放っている。気弱なウェインは次第にその圧力に耐えられなくなったのだろう。顔色が真っ青を通り越して真っ白になっていく。それから、とうとう震えながら口を開いた。

「……み、みた」

その瞬間、コンスタンスが破顔した。それは、完全な捕食者の笑みだった。

「僕、み、見ました。ミス・グレイルは盗んでない。ただ、ブレンダの乱れた髪を直してあげただけだ。そ、それに、ブレンダは、髪飾りをミス・グレイルに預かっていて欲しいって言ったんだ……！」

——あの役立たず！ パメラの目の奥が怒りでチカチカと瞬いた。周囲の目がなければ、ウェイン・ヘイスティングのそばかすの浮いた頬を引っ叩いてやるところだった。

「わ、私も聞きました」

厄介なことに、レモン色のドレスの女もか細い声を上げた。すると「わたくしも見ていたわ」「私も聞いたぞ」「その子の言う通りだ」「髪飾りを手渡していたのも見た」と次々に声が上がっていく。なんなのだ、これは。

今度は猜疑の眼がパメラに向けられた。なじるように突き刺さってくる周囲の視線に足が竦む。こんなはずじゃなかった。こんなはずでは。ニールまでもが腕を組んで難しそうな顔をしてくる。

「本当なのか、パメラ」

「ち、違うのよ。だって、だって、ブレンダが——そうだわ、ブレンダが私に嘘を……！」

こうなったらブレンダのせいにするしかない。パメラは何も知らず、ただ助けを求める友人のために動いただけだ。そうよね？ とブレンダに視線を向けると——

「——かわいそうに、ブレンダったら怯えているじゃない」

それは、どこかで聞いたような言葉だった。見れば、コンスタンス・グレイルが慈愛に満ちた微笑をブレンダに向けていた。

相変わらず、地味でパツとしない顔。なのに、こういうわけか、ひどく美しく見えた。ブレンダも魅入られたようにコンスタンスを見つめている。

「いいのよ、ブレンダ。何も言わなくていいの」

コンスタンスは、先程のパメラの台詞を一言一句間違えずに繰り返した。

ブレンダの瞳から涙があふれ、頬を伝う。パメラは、ぐつと唇を噛みしめた。

もはや勝敗は、火を見るより明らかだった。

「——これは、いったい何の騒ぎかな」

でつぷりと肥えた腹を揺らしながら螺旋階段を降りてきたのは、今宵の夜会の主催者であるハームズワース子爵だった。どうしてここに、と思ったが、ほんの少し前に自分が呼びに行かせたのだとパメラは思い出した。

「やだ、成金豚だわ」

コンスタンスが何か呟いたが、生憎内容までは聴こえなかった。

すぐに何人かが子爵に近づいて、事の次第を面白おかしく説明したようだ。子爵はいちいち大袈裟に目を見開き、肩を竦め、嘆いてみせる。一通り聞き終わると、同情するように眉を下げてコンスタンスに向き直った。

「災難だったね、グレイル嬢」

対するコンスタンスはどこか冷やかな笑みを浮かべていた。相手を見下すような、パメラがこれまで一度も見たことのない表情だ。

「——ええ、とっても。あまりの仕打ちに神聖なる宣誓に背いてしまいそうですわ。背教者になる前に女神の慈悲に縋りたいのですが、ご相談に乗って頂いても？」

「それは婚約の異議申し立て、ということかね」

「受理されるでしょうか」

「もう公示されてしまっているから、すぐには難しいだろうね。相手方の言い分もあるだろうし」

「哀れな仔羊に、祝福を与えてはいただけないのですか？」

「私がかい？ もしろん、そうしてあげたいのは山々だけだね。残念なことに私は教区が違ふし、そもそも、異議申し立てはこんな場所で行えるものではないんだよ。然るべき場所、きちんと順序立てて行わないと。知っての通り、教会というものは不可侵なのだ」

それはそうだろう。さすがにパメラだって、まさかこの場で手続きができるとは思っていないかつ

た。子爵を呼んだのは、ただあの女に恥をかかせてやりたかっただけだ。まあ、愛想を尽かせたニールが明日にでも本当に異議申し立てを行ってくれば、とは思っていたが。

教会というものは、たかが下位貴族の一存でどうこうできるものではないのだ。だから、次に聞こえてきた言葉にパメラは己の耳を疑った。

「そんなこと、わたくしの知ったことではないわ」

——この女は、今なんと言った？

「お前の夜会で起きた不始末よ。お前がなんとかなさい」

それは、他人に命じることには慣れ切った口調だった。けれど、目の前にいるのはあのコンスタン・グレイルなのだ。広間が再びざわつき始める。

「決して難しいことではないはずよ。特に、お前みたいな人間にとってはね。御託は良いからさっさとこの婚約を無効にしてください、この愚図が。さもなくば——」

決して大きいわけではないのに、その声は、はつきりと広間中に響き渡った。

「今宵、この小宮殿で行われたドミニク・ハームズワースの夜会は、崇高なる王家の庭で男女が入り乱れいかかわしいことをするものだったと、どんな手を使ってでも陛下の耳まで届くようにし



てやるわ」

大広間は、今やコンスタンス・グレイルのためにあつた。あれほど侮辱を受けたはずのハームズワース子爵は、なぜか目を輝かせてすぐさま侍従に何かを命じた。まさか本当に婚約破棄の手續きでもさせるのだろうか。

パメラは必死に考えを巡らせた。どうにかして事態を挽回しなければいけなかった。そうしないと明日からパメラには社交界の居場所がなくなる。

ニールはおそらく役には立たないだろう。いくらお洒落で、ハンサムで、頭が良くても、彼はやはり貴族ではなかった。この展開についていけず、そして、これから待ち受ける事態にも気づかずに立ち尽くしている。

「——紳士淑女の皆様方」

いつも壁の花で、人前では気の利いたことひとつ言えなかったコンスタンス・グレイルが、まるで舞台女優のように堂々と立ち振舞っている。

そのことを、誰も疑問に思わないのだろうか。

「この素晴らしい場に水を差してしまったことを心よりお詫びいたしますわ。道ならぬ恋に燃える若き男女にどうか祝福を。宴はまだ始まったばかりですもの。——思う存分、楽しまれて？」
このふたりで。

言外にそう言われた気がして、パメラの二の腕が栗立った。思わず絶るように口を開く。パメラの勘が危機を告げていた。早くなんとかしなければ、ひどいことになる。

「お願い、ちょっと待って——」

コンスタンス・グレイルなら必ず謝罪を受け入れるはずだ。予想通り、彼女はちらりとパメラを見たけれど、見た、だけだった。

パメラに気がついたコンスタンスは、わずかに目を眇めるとすぐに顔を背けてしまった。それは謝罪など許さないというような激昂した態度ではない。むしろ、うっかり羽虫が視界に入ってしまった。そんな表情だったのだ。そこで初めてパメラは気がついた。

この女は、誰だ。

これは、パメラの知っているコンスタンス・グレイルではない。

「あら、わたくし眩暈が。その孔雀青のベストがよくお似合いな方——ええ、あなたですわ。あなたのたくましい腕を、少しだけお借りしてもよろしいかしら？　心が痛くて、ひとりりで歩けそうもないのです。すぐそこまでですわ。外に迎えが来ているはずなので」

顔は平凡なのに、そこに乗せられた表情はひどく艶めいていた。信じがたいが、そうしているとあの地味な女がたいそう魅力的な女性に見える。実際コンスタンスに選ばれた男はわずかに相好を崩し、それからパメラに蔑むような一瞥を寄越した。

「もちろんです、レディ」

——負けた。女として、コンスタンスに負けた。それは、パメラにとって体が震えるほどの屈辱

だった。

「それでは皆様、ごめんあそばせ」

コンスタンスは背筋を伸ばしたまま優雅な仕草でゆったりとした裾を摘まみ上げる。それから流れるように頭を下げた。

あまりに自然で非の打ちどころのない淑女の礼は、パメラでさえも一時の激情を忘れてしばし見惚れるほどだった。

コンスタンス・グレイルは立ち去り、いつの間にか中断していた楽士たちの演奏が再開される。それは、宴の終わりを告げるような物悲しい小夜曲だった。

パメラはいよいよ抜き差しならない事態になっていた。誰も彼もがパメラを非難しているような気がした。視線を感じる。じろじろと見られている。負けるものか。顔を上げて、何でもないようにやり過ごそうとする。けれどやはり内心では恐ろしかった。

だから、その場に見知った顔を見つけた時は思わず飛びついていた。

「ホランド夫人！」

ふくよかな女性が驚いたようにこちらを見る。ホランド夫人なら大丈夫だ。守ってもらえる。

社交界デビューした日から今まで、彼女はパメラのことを娘のように可愛がってくれていた。

「助けてください、騙されたのです。運命の三女神に誓って、私はこんなこと致しません。夫人な

ら、信じてくださいますでしょう？」

誤解なのだと傷ついた表情を作り、縋るように夫人を見つめる。お優しいホランド夫人なら、これで充分のはずだ。肩を抱いて、かわいそうに大変だったわね、そう言ってくれる。

パメラの予想通り、ホランド夫人は微笑んでいた。パメラもほっとして笑顔を返す。けれど、次の瞬間凍りついた。

「ごめんなさい。あなた、どちら様だったかしら？」

ひゅっ、とパメラは息を呑んだ。

優しくったはずの夫人の瞳が、ひどく愉しそうに、歪んでいる。

立ち尽くしていると、どん、と誰かがぶつかってきた。パメラはよろめいて尻もちをつく。そのわずかな間にホランド夫人はどこかへ行ってしまった。

あらごめんなさいね、平然とした口調で謝罪したのは扇子で口元を隠した貴婦人だった。ターク・ブロンドの髪を結いあげた細身の女性は、確か、エマニュエル伯爵夫人と名乗っていたか。コンスタンス・グレイルと交流のあった人物だ。思わず身構える。

案の定、伯爵夫人は立ち去らず、一方的にパメラに話しかけてきた。

「——私ね、グレイル嬢のことを本当に歓迎していたのよ。特筆することのないつまらない子だけれど、悪い子ではないもの。グレイル流に言うところと誠実ってやつね。それってこの世界ではとっても珍しいことなのよ。わかるでしょう？ だからあなたのやったことはちょっとだけ腹立たしいわね。そう、ちよっとだけ。まあ、でも、結果的に面白いことになったから許してあげる」

そう言って、起き上がるこのできないパメラに手を差し伸べてくる。
「だって、私が何もしなくなつて、あなたとワルツを踊りたい方々が手葉煉てくすねを引いて待ち構えているみたいものだ」

はっと気づいて辺りを見渡せば、パメラはたくさんの人に囲まれていた。ひっそりと流れていた曲がふいに転調する。広間に明るく鳴り響いたのはテンポの速い三拍子のメロディ——円舞曲ワルツだ。さっとパメラは青ざめた。くすくすという笑い声がさざ波のように寄せては引いていく。

はい、いよいよ、こちらを覗き込んで来るのは、いずれもある程度の年齢の者たちだった。パメラと同年代の者はいつもと違う夜会の空気に萎縮し、いったい何が起こったのかと遠巻きに見つめているだけ。当然だ。

こんな、こんな夜会は、パメラだって知らない。

パメラにとって夜会とは、ひどく退屈で模範的なものだった。悪口も嫌がらせもおまごとのように可愛らしく、それならば平民の男たちとつるんで下町の怪しげな酒場で遊ぶ方がよほど刺激的だった。だからこの計画を実行したのだ。この程度の奴らなら手玉にとれると、そう思ったのだ。

伯爵夫人はすれ違いざまに、パメラの耳元で低く囁いた。

「——私の故郷ではね、盗人は焼けた靴を履かされて死ぬまで踊り続けるのよ」

※

「ああ、始まった始まった」

「懐かしいわね」

「十年ぶりだ」

「どのくらいもつかしらね、あの子たち」

「あら、せめて私の番までは元気でいてもらわないと」

「昔から宴の醍醐味だいてみみだったものね。でも、本当に久しぶりだわ。この十年、みんな気が引けていたから」

「悪目立ちして処刑でもされたらごめんだからな」

「ええ、十年前みたいだね」

「あれはひどかった」

「しっ。だめよ、口にしては」

「でも、それにしても驚いたな。あれはまるで——」

「ええ、まるで——」

「——まるで、スカーレット・カステイエルが地獄の底から舞い戻ってきたみたい」



ニール・
ブロンソン

たぶん十七、八くらい。ブロンソン商会の嫡男でコニーの婚約者。見た目は洒落な好青年。しかしパメラと浮気したため、世が世ならゲスの極みと罵られ記者会見を開かなければいけなかったに違いない。



スカーレット・
カスティエル

享年十六歳。永遠の十六歳。黒髪に紫水晶の瞳。セシリア王太子妃の暗殺未遂でサンマルクス広場で斬首刑に処された。モットーは、お前のものは俺のもの。俺のものは俺のもの。なんだか記憶力が良さそう。



コンスタンス・
グレイル

誠実がモットーの十六歳。榛色の髪に若草色の瞳。地味で冴えなくてバツとしない上に婚約者に浮気されてもう泣きそう。ピンチに助けを求めたらとんでもないジャ○アンがやってきた—new!



パメラ・
フランシス

たぶん十五、六くらい。プラチナブロンドの髪。コニー世代の裸の女王さま。接吻なんて朝飯前なおませさんで、ニールと浮気していた。裕福な男爵令嬢で、人を利用して甚振るのが好き。けっきょく自分が散々甚振られる羽目になった。



ブレンダ

たぶん十五、六くらい。パメラの金魚の糞。もしくは女王の恐怖政治に脅えていた民衆その一。

ミレーヌ

たぶん十五、六くらい。コニーの友人。ちょっぴり無神経でゴシップ好きな子爵令嬢。



ハームズワース
子爵

たぶん三十代後半くらい。すべての発端となったグラン・メリル＝アンの夜会の主催者。豚になる呪いをかけられたのかと思うほど肥えている。ちなみに独身。ものすごい金持ちらしい。冗談は顔だけにしておいて欲しいが聖職者でもある。

エマニュエル
伯爵夫人

たぶん三十代半ば。おっとりしてそうで毒舌。コニーのことはそれなりに可愛がっていた様子。あとなんか故郷が可愛い。

第二章

希代の悪女と平凡な少女

コニーが目覚ますと、陽はすでに高く昇っていた。柔らかな光に、澄んだ空気。窓の向こうではチチチチ、と小鳥が歌っている。

何だか怒涛の夢を見た、ような、気がする。そう、まるで、パメラ・フランシスをぎゃふんと言わせたような——

（いやいやいや、さすがにそれはあり得ない）
だって相手はあのパメラである。

コニーは目を瞑ったまま肩を後ろに反らし、思い切り伸びをした。
うん、あり得ない。自分で言うのも悲しいが、コンスタンス・グレイルは地味で冴えない小物なのだ。

物悲しい気持ちになりながら顔を開けると、目の前に、ひとつの顔があった。

「……ん？」

吸い込まれてしまいそうな紫水晶の瞳に、夜の帳のような髪。

「……んん？」

その外貌は魂を奪われてしまいそうなほど美しい。けれど、同時に猛烈な違和感を覚える。

ここは、コニーの寝室ではなかったか。そう思って視線をぐるりと巡らせる。見慣れた蔦模様の壁紙に、寝台の横には金の取っ手のついた猫脚のサイドチェスト。二人掛けの長椅子に、脚の短いガラス天板のテーブル。部屋の隅には化粧台を兼ねた引き出し付きの収納机。

そして、窓の向こうには色彩豊かな尖塔が見える。グレイル領は緑ばかりだが、王都は建物ばかりだ。もともと、社交シーズンが終わる秋口には領地も紅葉で色鮮やかに染まっていることだろうが、いずれにせよ、コニーにとっては例年と変わらぬ王都の風景である。

『やっと起きたのね、コンスタンス・グレイル。お前、昨日は一日中寝ていたのよ?』

けれど、鈴を転がしたような可憐な声は、いつもの朝にはないものだった。

一拍の沈黙の後、コニーは叫んだ。

「ぎゃああああああ!」

目の前の少女がぎょっとしたような表情を浮かべて後退る。しかしコニーもまた動揺していた。小宮殿での情景がものすごい勢いで蘇ってきたのだ。それはまるで瞬きをする度に場面の変わる紙芝居を見ているようだった。

(ちょ、ちょっと待って——)

映像だけではない。感じるのは、その場の空気や、温度。それに声や匂い。すべてがあまりにも生々しい。これは、まさか——

「夢だけど、夢じゃなかった——!?」

愕然と叫ぶと、不機嫌そうな声が返ってきた。

『なに言ってるのよ。お前、まだ寝ぼけているわけ?』

いや、意識は、比較的はつきりとしていると思う。目の前にいるこの人は、大広間から温室へと続く廊下で出会った高貴な方だ、とコニーの記憶は告げてくる。けれど確信がない。やはり寝ぼけているのだろうか。これは、夢、なのだろうか。わからない。だからコニーは恐る恐る訊ねることにした。

「あのう、ど、どちらさま、でしょうか……?」

なんにせよ、ひとつだけ言えることがある。整いすぎて近寄りがたい美貌と、洗練された上品な佇まい。蠱惑的な肢体に挑発的なドレス。——そのどれをとってもコニーの知り合いでないことは明白だ。

少女はコニーの問いかけにふんと目を細めた。紅い唇がゆるやかに弧を描き、よく通る声が飛び出してくる。

『わたくし? わたくしは、スカーレット。スカーレット・カステイエルよ!』

——スカーレット・カステイエル?

「いやいやいや、そんなバカな。だって、スカーレット・カステイエルは十年前に処刑されていて……」

『やだお前、まさか、わたくしが生きているように見えるの?』

それが心底可笑しいと言うような口調だったので、コニーは思わずまじまじと目の前の少女を観

察した。精巧な顔立ちは確かにこの世のものとは思えないが、おそらく、そういうことではないだろう。顎から首筋にかけての線は華奢で、胸は豊か。腰はほっそりとくびれていて——そして、文字通り地に足がついていなかった。

なぜか、ふよふよと、浮いている。

それを目にした瞬間、コニーは再び意識を失った。

『ちよつと寝過ぎよ、お前』

呆れたような声にぼんやりと目を開けると、例の少女が腰に手をあててコニーを睥睨していた。

『それも、わたくしとの会話の最中に眠るなんて……！ そんな失礼な仕打ちをされたのは、生まれてはじめてだわ！』

いやだってもう死んでるがな。さすがにそうとは言えず、「失神です」と引き攣った声で答えた。

——紫水晶の瞳に、オニキスのように艶やかな黒髪。息を呑む美しさ。そのどれもが、かの有名なスカーレット・カステイエルを示す特徴である。言われてみれば、顔立ちも、似ているかもしれない。

といってもコニーが本物のスカーレットを見たのは十年前のことだ。それも一度きり。たいそう美しい人だったという記憶はあるが、実際の顔立ちはおぼろげである。それよりも生まれて初めて見た『処刑』の方が強烈だった。あれから這う這うの体で家路についたコニーは倒れ込むようにして三日三晩寝込んだのだ。もはやスカーレット・カステイエルという符号はコニーのトラウマの

頂点として君臨している。

「で、でも、なんで小宮殿に……？ スカーレット・カステイエルの亡霊はサンマルクス広場に
いるんじゃない……」

首なし令嬢が頭を求めて夜な夜な徘徊しているという噂は王都七不思議のひとつにも数え上げられるほど有名である。そう告げると、スカーレットは怪訝そうに首を傾げた。

『サンマルクス広場？ ああ、わたくしが処刑された場所ね。あんなところ、この姿になつてから一度も行ったことないわよ。だいたいわたくし、自分が処刑された日のことなんてちっとも覚えていないもの』

そうなのか。自称・スカーレットの台詞にコニーはほんと胸を撫で下ろした。あの日、広場は人間の悪意で満ちていた。覚えていないのなら、その方がいいだろう。

『——それに引き換え小宮殿は、間拔けなエンリケと腹黒セシリアに屈辱を味わわれた場所なのよ！ まったく、今思い出しても腹立たしいわ！』

「ちょ、王子に向かってそんな不敬な……！ それに、は、腹黒……!?!」

聖女アナスタシアの再来と名高い慈悲深き王太子妃様になんてことを言うのだ。けれど、暴言を吐いた当人は気にした素振りもなく話を続けていく。

『とにかく、気づいたら小宮殿にいたんだけれど、どうしてか広間には入れなかったのよね。入ろうとしても弾かれてしまうの。やっぱり死者には何か制約があるのかしら』

スカーレットは何かを思い出そうとするように首を捻った。

『わたくし、自分がいつからこの状態だったのかよく覚えていないけれど、中に入れたのは、きつと、お前のおかげなんでしょうね。誰に声を掛けても聞こえない。視線だって交わせない。そんな中で、わたくしの存在に気がついたのはお前がはじめてだったのだから』

「スカーレット様……」

儂げな微笑を浮かべる少女の姿に胸が詰まった。そのまま言葉を失っていると、彼女は「わかっている」というように頷いてみせる。

『お前は地味でバツとしなくて特に取り柄もないようだけれど、わたくしに気がついたことだけは存分に誇ってよくつてよ!』

「うん、それちよつと違う」

真顔になって否定した。今のは特にそういう意味での沈黙ではなかった。ついでに思い出す。あの時、小宮殿の大広間に入る直前、少女は確かにこう言ったのだ。

——お前、礼を言うわ。

よくわからないが、コニーが声を掛けたことで少女は広間に入ることができたらしい。なるほど、とひとまず納得したが、それでもひとつ疑問が残る。

「でも、なんだって我が家に——」

ついてきたのだろうか。

広間に入るといふ目的を果たしたのだから、後はそのままどこへなりと行けばいいと思うのだが。疑問が顔に出ていたのか、自称・スカーレットは半眼になると腰に手を当てコニーを見下ろして

きた。

『だってまだ対価をもらっていないもの』

「たいか?」

『あら忘れちゃったの? 対価もなしに、赤の他人を助けるわけがないでしょう?』

そう言つて、ふふ、と笑う。その顔に浮かぶのは、獲物を追いつめるような、ひどく獐犷な美しさだ。その瞬間、脳裏にひとつの声が蘇った。

——いいわ、助けてあげる。でも、その代わり——

ふいに冷水を浴びせられたように血の気が引いていく。あの時、声は最後まで聞こえなかった。

けれど古今東西、異形のものとの契約の対価と言えど——命、が定番ではないだろうか。コニーは身震いする体をぎゅつと抱きしめ、声を振り絞った。

「き、聞こえなかったんです……!」

「は?」

「ほ、本当に、聞こえてなくて! 何が起こったのかもわかってなくて! だ、だから命は……!」
どうか命だけはご勘弁を——そう言つて縋りつくも、少女はけらけらと愉しそうに嗤うだけだった。

『だーめ』

絶望に視界が真っ暗になる。じわり、と瞳に涙が滲んだ。

(ああ父様、母様、先立つ不孝をお許しください——)

持つて生まれた容姿のようにバツとしない人生でした。コニーは肩を落としてがっくりと項垂れた。

スカレット・カステイエルが、圧倒的な存在感を纏ってコニーに近づいてくる。嗜虐的な笑みを浮かべたその姿は、噂に違わずまさに希代の悪女そのものだ。

『助けてあげたのだから嫌とは言わせないわよ』

この時、哀れなコンスタンス・グレイルは、三女神の末子が人間の運命の糸を断ち切るように、己もまた希代の悪女によって死後の世界に連れて行かれるのだとばかり思っていた。

『いいこと、コンスタンス・グレイル』

ぎゅつと目を瞑って覚悟を決める。けれど待っていたのは終焉ではなかった。続く未来は、コニーの予想とはちよつとばかり違っていたのだ。

『——お前のこれからの人生をかけて、わたくしの復讐を成功させなさい！』

思いもよらない言葉にコニーはぱくりと目を瞬かせた。

「……復讐？」

スカレットは紫水晶の双眸に燃えるような怒りを湛えてこちらににじり寄ってくる。

『ええ、そうよ。わたくしを処刑に追い込んだ不届き者どもをひとり残らず地獄に落としてやるのよ——』

「そ、それは」

ただならぬ気配に気圧されて、コニーは、一步、後退った。ごくりと唾を呑み込む。

「いったいこのどちら様方で……」

そう簡単にはと頷くわけにはいかない。復讐の相手が誰かもわからないのだ。事と次第によってコニーだけの問題では済まなくなる可能性だってあるだろう。

『知らないわよ』

「へ？」

『だってわたくし、嵌められたんだもの。あの小娘に毒を仕込んだ罪で処刑されたけれど、そんな地味なこと、このわたくしがするわけじゃないじゃないの』

スカレットはそう言うと、不愉快そうに瞳を眇めた。

今なんと？ コニーは思わず言葉を失い、たった今とんでもない発言をした相手を見つめる。

身に覚えのない罪での処刑。

——それは、つまり、冤罪というのでは？

『だからね、コンスタンス。お前の役目はわたくしの手足となって真犯人を見つけ出し、そいつらに生き地獄を見せてやることよ！』

なんてことだ。心臓が早鐘を打った。コニーは、今の今までスカレット・カステイエルは悪だと信じていた。信じ切っていた。愚かにも、まことしやかに流される噂なんかによって！

「じゃあセシリア妃の生家に圧力をかけて一族郎党土下座させたっていうのも嘘だったんですね……！」

これほどの美貌の持ち主だ。さらには王家も降嫁してくるような大貴族であるカステイエル公爵家の血統を持ち、王太子殿下の婚約者ときたら彼女のことを妬む者は多かっただろう。おそらく、

そういった負の感情がこんなひどい噂を作り出したのだ。スカーレットは常に孤独だったに違いない。せめてコニーだけは本当の彼女を見つけて理解してあげなければ――

ぐっと拳^{こぶし}を握りしめ、氣遣うように微笑^{ほほえ}みかければ、スカーレット・カステイエルはきょとんとした表情を浮かべていた。

『え？ やったわよ？』

「……はい？」

『なによ』

「……いい、いえ。え、ええと、そしたら権力にもの言わせてセシリア妃を不敬罪で投獄したっていうのは――」

『あつたわね、そんなこと。あの女、全然懲りてなかったけど』

「……その、赤ワインぶっかけて舞踏会の最中にドレスを脱がしたやつは」

『下着を脱がしたわけじゃないんだから別にいいじゃない』

「……公衆の面前での全力往復ビンタ……」

『その何がいけないの？』

コニーは思わず息を吸い込んだ。

「色々やってるじゃないですか!？」

『なによ、別にたいしたことないじゃない』

「充分たいしたことですよ！ 確かに処刑にはならないでしょうけど、普通に捕まってもおかしくあ

りませんよ!？」

『なんですって!？ お前、わたくしを誰だと思っているのよ!』

きつと瞋^{まじど}が吊り上がり、噛^かみつくように一喝される。

「ひつ、スカーレット・カステイエル様ですごめんなさい!」

『そうよ！ わたくしは偉いのよ！ たかが子爵家の小娘をちょっと小突^{こづ}いたくらいなんでもないのよ!』

「いやでもけつきよく処刑されてるし!」

――あ、しまった。

滑らせてはいけないところで口を滑らせるのは、コニーの悪い癖^{くせ}である。さあっと血の気が引いていく。あまりの恐怖にスカーレットの方を見ることができない。視線を逸らしながら、それでも最後の力を振り絞って口を開いた。

「あ、あのやつぱり復讐のお手伝いは――」

よくないと思うんです。

けれど渾身^{こんしん}の訴えは声になる前に一蹴された。

『――借金』

それはまるで、風^ないだ海のように穏やかな声^{こゝろ}音^{おと}だった。

『この家、借金があるんでしょう？ これからどうするの？ 婚約破棄なんてしちゃって』
してない。コニーはしてない。やったのは目の前の女王様である。

しかし、結果だけ見れば全く以ってその通りだった。今回の一件でブロンソン商会の後ろ盾はなくなった。グレイル家は外聞と婚約者を捨て、恥と借金だけを残したのである。

コニーは悄然と肩を落とした。考えれば考えるほど己の首が絞まっていく気がしてならない。

『助ける方法がないわけではなくてよ』

その言葉に、ぱっと顔を上げた。よほど^{すが}絶るような表情をしていたのだろう。スカーレットが愉しそうに目を細める。

『わたくしの復讐に、協力、するわよね？』

「う……」

『それに、まさかとは思うけれど、誠実のグレイルが受けた恩を返さないなんて——そんな不誠実なこと、あるわけないわよね？』

「なにをすればよろしいでしょうか」

反射的に返事をすれば、希代の悪女はにんまりと口の端を^つ吊り上げた。

試読版をお読みいただきありがとうございます。

ここからは製品版「エリスの聖杯」でお楽しみください！